

## 女子だけ水着着用禁止の混浴温泉に 修学旅行で男子と混浴！

お盆を過ぎ、夏の盛りも終わりを告げようとしている8月下旬。山間の木々が涼やかな風にそよぐ中、都心から遥か遠く離れた山奥に、ひっそりと「霧の谷温泉」は佇んでいた。その秘湯は、古くから地元で囁かれる「奇妙なルール」で知られていた。湯に浸かるのは混浴でありながら、男には水着の着用が義務付けられ、女には水着の着用が禁じられるという、困惑を呼ぶ取り決めだ。温泉の管理人である田中夫妻は、その理由をこう説明した。「男は、あそこがブラブラしてはみっともないから、水着で隠せ。女は、隠すような邪魔なものがないのだから、裸のままで良い。自然のままに温泉を楽しめば良いのだ」と、皺だらけの顔に深い笑みを浮かべ、二人はニヤリと笑った。その

言葉に、湯を求めて訪れる者は眉をひそめながらも、古くからの因習に従わざるを得なかった。

この秘湯を訪れたのは、都内の公立中学の3年B組の生徒たちだった。林間学校の一環として企画されたこの旅行に、クラスの男子15人、女子15人の計30人が参加していた。引率の佐々木先生は40代の生真面目な男性で、今回の林間学校を「自然との対話と仲間との絆を深める絶好の機会」と位置付けていた。しかし、生徒たちはバスの道中、早くも温泉の「謎ルール」の噂に沸き立っていた。男子はこれからの出来事に興奮と期待で胸を膨らませ、女子は不安と羞恥でざわつき、その胸の内は千々に乱れていた。

バスの窓際には、男子の翔太がスマホで温泉の情報を検索しながら、口元を緩ませていた。180センチの長身、水泳部で鍛え上げられた筋肉質の身体を持つ彼は、クラ

スのムードメーカー的存在だ。「なあ、拓也、マジで女子が全裸って、やべえだろ？彩花の身体、ぜってえエロいって...」と、隣の拓也に囁いた。翔太の瞳は期待にきらめき、ズボンの中で股間がすでに熱を帯び、疼いているのが彼自身にもはっきりと感じられた。彼は彩花のスレンダーな肢体を想像し、心臓が高鳴るのを止められなかった。拓也は175センチ、バスケット部で引き締まったクールな体型の持ち主だが、その内心は翔太と同じく、高まる期待で胸が熱くなっていた。「美優の裸...想像しただけでゾクゾクする」と小さく呟き、股間の熱さを隠すように脚を組み替えた。悠斗は170センチの平均的な体型で、少し気弱な性格だが、愛梨の豊満な身体を想像して顔を赤らめ、「愛梨の...あの...見たら死ぬかも」と震える声で囁いた。興奮のあまり、手のひらにはじんわりと汗が滲んでいた。涼太はサッカー部のがっしりとした体格で、普段から大胆な発言で周囲を驚かせる男だ。「美咲の

裸、マジで楽しみだぜ！ エロすぎるに決まってる！」と声を上げると、周囲の男子からは下品な笑いと野次が飛んだ。男子たちは皆、これから目の当たりにするであろう温泉での光景を想像し、股間が疼き、全身が熱く火照っていた。

一方、女子の席では、不安と羞恥の渦が彼女たちを包み込んでいた。彩花は165センチのスレンダーな体型で、形の良い胸と引き締まった腰が魅力的な、クラスのリーダー格だ。彼女は窓の外を見つめながら、「なんでこんなルール...男子に裸見られるなんて、死にたい...」と呟き、羞恥で頬が熱く紅潮するのを感じた。心臓が締め付けられるような痛みと、胸を突き刺すような悔しさに、彼女は唇を噛み締めた。美優は158センチの小柄な体型で、柔らかな胸と愛らしい曲線を持つおっとりとした性格だが、今は絶望のあまり全身が震えていた。「やだ...恥ずかしすぎる...翔太とか、絶対ジロジ

口見てくるよね…」と、隣の愛梨に囁いた。声は震え、瞳には涙が浮かび、悔しさで拳を固く握りしめた。愛梨は色白で、豊満な胸と丸いヒップが目を引く自信家だが、今回は恐怖で顔色が青ざめていた。「裸で入るなんて…最悪。涼太のあの下品な目、想像しただけで吐き気がする」と、唇を噛み締め、悔しさで身体が小刻みに震えた。美咲は168センチ、テニス部で鍛えられた筋肉質な身体に、大きくて重量感のある胸が特徴的だ。普段は堂々としている彼女だが、「男子が水着なのがマジでムカつく。私たちだけ裸って、意味がわからない！」と声を震わせ、羞恥と悔しさで顔を真っ赤にしていた。

バスが霧の谷温泉の駐車場に到着したのは、午後3時を少し過ぎた頃だった。山の斜面に建つ木造の旅館は、歴史を感じさせる佇まいで、苔むした石段が温泉の入り口へと続いていた。生徒たちはバスから荷物を

降りし、旅館のロビーに集まった。皆、中学の制服姿のままで、どこか緊張した面持ちだった。そこに、温泉の管理人である田中さんが立っていた。白髪を後ろで束ね、皺だらけの顔に笑みを浮かべた彼が、改めて温泉の「奇妙なルール」を説明し始めた。

「ようこそ、霧の谷温泉へ！ ここは混浴の湯だが、一つ、守ってもらいたいルールがある。男子は水着を着なさい。あそこがブラブラしては、見るに堪えないからな！ 女子は水着禁止だ。隠すような邪魔なものがないのだから、裸で十分。自然体で温泉を楽しんでくれよ！」

田中さんの説明に、男子たちは互いにニヤニヤと顔を見合わせ、興奮で股間が熱くなるのを隠しきれない様子だった。女子たちはその場で凍りつき、彩花が震える手でゆっくりと挙手した。「あの...なんで女子だけ裸なんですか？ 不公平すぎます！ 恥ずかしいんですけど！」彼女の声は震え、羞

恥と悔しさで顔が真っ赤だった。美優が「こんなの...無理...恥ずかしすぎる...」と小さな悲鳴を漏らし、愛梨が「意味わかんない！ 最低！」と叫んだ。美咲は「こんなルール、ふざけてる！ なんで私たちだけが！」と怒りを露わにし、悔しさで拳を固く握りしめた。しかし、田中さんはニヤリと笑うばかりだ。「女の身体は、それ自体が自然の美しさだ。隠す必要などない。男はあそこが邪魔で恥ずかしいから隠すのだ。これも古くからの伝統だよ、従ってくれ」と、まるで禅問答のような答えを返した。佐々木先生が「郷に入っては郷に従え、だ。ルールは守って、皆で楽しく過ごそう」と仲裁に入り、女子たちの切実な抗議は、無情にも押し切られてしまった。女子たちは絶望に顔を見合わせ、涙目でうつむき、悔しさで胸が締め付けられる思いだった。

生徒たちは、男女共用の更衣室へと案内された。広々とした木造の部屋には、籐製の

籠と木製のベンチが整然と並び、壁には大きな鏡がかけられていた。男女一緒という状況に、女子たちの羞恥はさらに募り、その瞳には悔し涙が滲んでいた。一方、男子たちはこれからの展開に興奮で目を輝かせ、股間が疼くのを抑えきれない様子だった。